

# 「体づくり運動」の授業を通して得られた教師に求められる知識

糸岡 夕里<sup>1)</sup>

Required knowledge for teachers who obtained it from classes of "Physical Fitness"

Yuri Itooka<sup>1)</sup>

Key words: required knowledge for teachers, Physical Fitness

(Bulletin of Department of Physical Education, Faculty of Education,  
Ehime University, 7,53-60, March, 2010)

キーワード：教師に求められる知識、体づくり運動

## I はじめに

社会の大きな変動に対し、学校教育に対する国民の期待に応えるためには、教員に対する揺るぎない信頼を確立し、国際的にも教員の資質能力がより一層高いものとなるようにすることが極めて重要である。変化の激しい時代だからこそ、教員に求められる資質能力を確実に身に付けていくことの重要性が高まっている。また、子どもの豊かな成長には、日常的に子どもの教育にかかわっている教師の資質や能力が大きく関係していることはいままでもない。

教師に求められる資質能力として、中央教育審議会の答申「新しい時代の義務教育を創造する」(2005)では、「教職に対する強い情熱」「教育の専門家としての確かな力量」「総合的な人間力」が示されている。教職に対する使命感や誇り、子どもに対する愛情や責任感といった「教職に対する強い情熱」や、豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめとした対人関係能力、コミュニケーション能力といった「総合的な人間力」は、教師を支える重要な資質能力にほかならない。一方で、「教師は授業で勝負する」といわれるように、「教育の専門家としての確かな力量」が教師には求められている。

教師に求められる力量には、様々な捉え方があるが、

吉崎(1997)は、「授業についての信念(価値観)」「授業についての知識」「授業についての技術」の3つの側面から捉えている。本研究では、教師が身につけるべき知識の総体である「授業についての知識」に着目することとした。

「授業についての知識」<sup>注1)</sup>は、「教材内容についての知識」「教授方法についての知識」「子どもについての知識」の3つのカテゴリからなり、それぞれを独立して捉えるのではなく、それぞれが融合したカテゴリが存在し、特にその融合した知識が重要となる(吉崎, 1997)。各カテゴリについて体育授業に引き寄せて説明すると以下の通りである。

「教材内容についての知識」は、学習内容を習得するための学習活動の対象となる内容(運動課題)に関する知識のことである。当然ながら、授業で何を教えるのかといった教科内容をも含めた知識のことであり、各スポーツ種目における技術や戦術、多種多様な運動と教材との関係などについての知識である。

「教授方法についての知識」は、系統学習、発見学習といった学習指導の方法的側面からみた学習指導形態や、一斉学習、班別学習といった学習者の組織的側面からみた学習形態、そして前時の復習、発問、課題の提示、展開、まとめといった授業構造、さらには学習指導、学習活動、マネジメントといった授業運営に関する知識のことである。

「子どもについての知識」は、発達段階からみた子

1) 愛媛大学教育学部  
〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番

1. Faculty of Education, Ehime University,  
Bunkyo-cho 3, Matsuyama-shi, Ehime,  
〒790-8577, Japan

どもの技能的、認知的、情意的特徴に関する知識のことである。ここでは、子どもに関する一般的理論に限らず、子どもとの直接的なかかわりを通して学ぶ経験的な知識も重要である。特に対象となる子どもの個々の特徴や性格、さらには集団の中における子ども同士の関係性などを理解しておく必要がある。

本研究では、授業を通して得られた教師に求められる知識として、この吉崎(1997)の提案した「授業についての知識」に基づき分析することとした。

ところで近年、体育教師に求められる実践的指導力の育成を意図し、大学の授業において模擬授業やマイクロティーチングが実践され、それらの成果が多数報告されている。その1つに、中学2年生を対象に模擬授業を実践し、模擬授業後に学生が記述した気づきについて、吉崎(1997)の提案した「授業についての知識」の各カテゴリーに基づき分析した報告がある(糸岡・日野, 2008)。その結果、①子ども理解、②子どもの実態をふまえた教材研究、③子どもの実態に応じた指導、それぞれの必要性について気づくことができたことと報告している。

しかしながら、その他の教員養成にかかわる授業実践の報告については、教育実習についての報告がいくつかあるものの、その他の授業については、ほとんど報告されていないのが現状である。より質の高い教員養成プログラムの在り方について検討するためには、教員養成にかかわる各々の授業において、何を教えたのか、そして学生がどの程度身につけたのかを明らかにしていく必要がある。

本研究では、その第一歩として、体育授業の中核には技能が位置づくことから、実技科目を取り上げることとした。愛媛大学においては、小学校体育授業について実践的に学ぶことのできる唯一の必修科目が、「スポーツと教育」である。この授業では、小学校体育授業における多くの領域について学ぶことができるように、1領域5時間ずつ3領域で構成され、各領域を専門とする教員が担当するというオムニバス形式で展開されている。

新学習指導要領(文部科学省, 2008)では、子どもの体力低下傾向が深刻な問題となっていることから、それぞれの領域の中でも「体づくり運動」が、特に重視され、小学校から高等学校まで毎学年で取り上げて指導するよう改訂された。これからの体育では、「体づくり運動」の学習指導の改善が、教科として評価を受ける重要な領域になるという認識をもつ必要がある(三木, 2009)。つまり、新しい「体づくり運動」の趣旨を、どのように理解し、いかにして指導していくのが注目されている。

そこで本研究では、「体づくり運動」の授業を対象とし、教師に求められる知識の獲得について検討し、教員養成プログラムの在り方についての基礎資料を得ることを目的とした。

## II 方法

### 2-1. 対象とした授業および学生

2009年度後期に愛媛大学において開講された「スポーツと教育」の授業における「体づくり運動」の領域5時間を対象とした。また、対象学生は、この授業を受講した教育学部学校教育教員養成課程の2回生30名であった。

### 2-2. データの収集および分析

「体づくり運動」の授業では、毎授業の活動内容と、そこでの学びをノートにまとめており、最後に総括レポートが課題として出された。そこで、総括レポートの内容を分析の対象とし、吉崎(1997)の提案した「授業についての知識」のカテゴリーに基づき、総括レポートの内容を意味のまとまりごとに区切り分類した。

図1は、「授業についての知識」の概念図を示している。

教師に求められる知識について検討する際、それらを支えている「教職に対する情熱」を無視することはできない。そこで、「教職に対する情熱」についても、同様の方法で分析することとした。

なお、指導内容については学生のノートを参考に考察を行った。

### 2-3. 「体づくり運動」の授業概要

「体づくり運動」の授業の基本的な流れは、授業のはじめに理論的指導があり、その後、その内容を踏まえた教材を実践するという展開であった。

表1は、「体づくり運動」の授業のねらいと指導内容、図2-図7は、授業の様子について示した。

図2のように毎回授業のはじめには、ホワイトボードを使用し、理論的な指導を行っていた。例えば、子どもの体力低下問題についての新聞記事を取り上げ、そもそも体力がないと人間はどうなってしまうのかといったことや、準備運動にはどのような意味があるのかといったことについてである。図3は、心拍数を計測し記録する様子である。この授業では、運動強度について、机上の知識にとどまらず、経験的に学習できるよう一定の活動後、心拍数を計測する時間を設定していた。

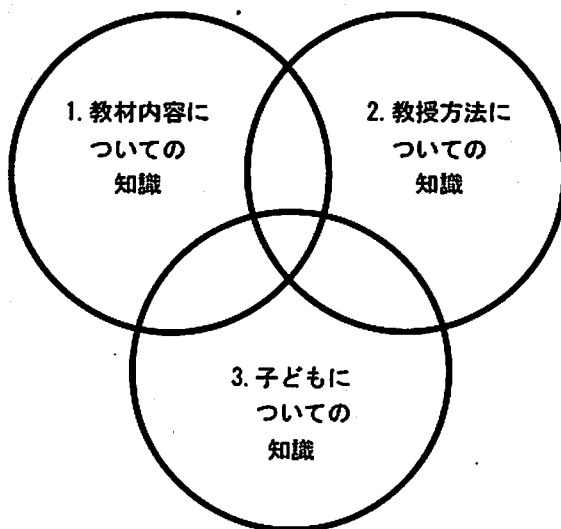


図1 「授業についての知識」(吉崎, 1997) の概念図

表1 「体づくり運動」のねらいと指導内容

ね ら い	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 人間の基本的な運動・動作や体力を高めるためのトレーニングを実践し、それらの方法について説明することができる。</li> <li>○ スポーツ的ゲームの実践を通して、コミュニケーションスキルを身に付けることができる。</li> <li>○ 教師としての心がけや体育安全管理の留意点について説明できる。</li> </ul>				
回数	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
理 論 編 の 内 容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他教科に見られない体育の独自の教育目標(杉山, 2002)</li> <li>・健康観察の大切さ</li> <li>・「体づくり運動」の4つの動き(歩く, 走る, 跳ぶ, 投げる)</li> <li>・発達段階に応じた運動種目, 運動量</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師の立ち位置</li> <li>・ペスタロッチの教育観</li> <li>・エネルギー消費の高い運動</li> <li>・ドッジボールのバリエーション</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・準備運動の目的</li> <li>・学習環境づくり</li> <li>・総合体カトレーニング(サーキットトレーニング)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員の健康管理の重要性</li> <li>・時間厳守の重要性</li> </ul>	学 生 に よ る 「 体 づ き り 運 動 」 を 教 材 と し た 模 擬 授 業 の 実 践
実 技 編 の 内 容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・出席の取り方, 注意点</li> <li>・足踏みゲーム</li> <li>・フライパンの上の仔猫ちゃん</li> <li>・ウォーキング(姿勢, 色々なステップ)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・押しくらまんじゅう</li> <li>・ウォーキング(跳躍, 走)</li> <li>・ボールの投げ方</li> <li>・様々なバリエーションによるドッジボール</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・準備運動の正しい順序</li> <li>・総合体カトレーニング(サーキットトレーニング)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・両足ジャンプ</li> <li>・ジェンガ</li> <li>・ムカデ遊び</li> <li>・手つなぎ鬼</li> <li>・ジャンプ, 横転, 側転</li> <li>・手押し相撲, 相撲遊び, 足裏相撲, 腕相撲</li> <li>・縄跳び</li> </ul>	

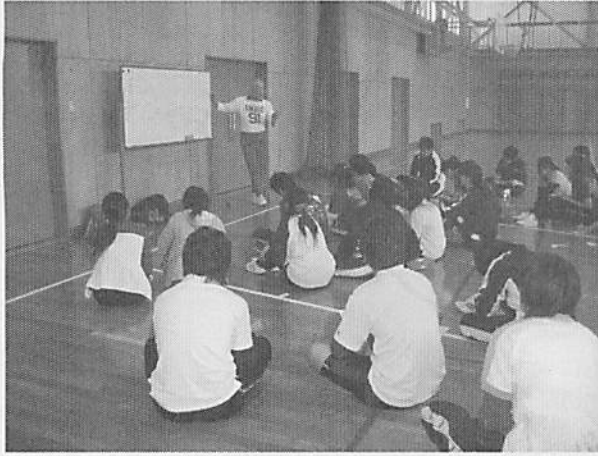


図2 授業の様子①



図5 授業の様子④

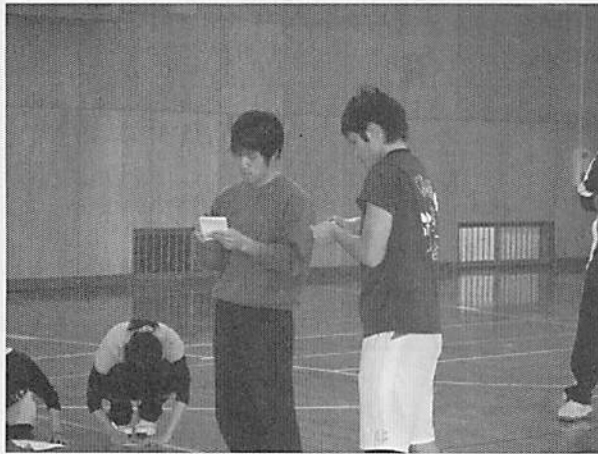


図3 授業の様子②



図6 授業の様子⑤



図4 授業の様子③



図7 授業の様子⑥

### III 結果と考察

「体づくり運動」の授業を通して得られた教師に求められる知識を検討するため、「授業についての知識」および「教職に対する情熱」に基づき、総括レポートの内容について分析した。図8は、「授業についての知識」および「教職に対する情熱」の各カテゴリーにおける記述数および割合、表2は、「授業についての知識」および「教職に対する情熱」の各カテゴリーにおける記述例、図9は、「授業についての知識」および「教職に対する情熱」の各カテゴリーにおいて記述のあった学生数について示した。

各カテゴリーの記述数では、「教材内容についての知識」が39 (47.6%) であり最も多く、次いで「教職に対する情熱」が22 (26.8%) であった。

「教材内容についての知識」が最も多かったのは、やはり、実際の体育授業で取り扱うような教材を実践しながら学ぶことができていたためだと考えられる。さらに教材を実践するのみでなく、授業後にそれぞれの教材についてノートにまとめていたことで、教材についての知識がより定着できたと考えられる。

「教職に対する情熱」について多くの記述が見られた要因として、以下のことが推察できる。第一に、教師として博愛の精神が重要であることを指導し、ペスタロッチの教育観や、子ども一人ひとりと向き合うことの重要性について指導していた。第二に、図3-図5の授業の様子からイメージできるように、何よりも本研究の対象授業を担当した教員自身が情熱ある指導を行っていた。そのことは、学生のノートの記録からも

確認でき、そのことに対して学生の肯定的な記述が多くみられた。

「教授方法についての知識」「子どもについての知識」については、授業の中で、それらの知識を指導しているものの、指導内容全体に対する割合としては少なかったと考えられる。

なお、「授業についての知識」では、それぞれの融合するカテゴリーが重要である(吉崎, 1997)といわれているが、本研究では、融合するカテゴリーについては、「教材内容についての知識」と「子どもについての知識」の融合するカテゴリーにおいて1つだけ記述がみられた。その具体的記述は、「発達段階に応じて適切な試行数を設定しなければならない」といった内容であった。このように、融合するカテゴリーについての記述が、ほとんどなかったということは、学生の知識が、指導内容の理解のみにとどまっておき、それらの知識を関連させ思考するには至っていないことを示唆している。

また、「授業についての知識」および「教職に対する情熱」の各カテゴリーにおいて記述のあった学生数は、「教材内容についての知識」では19名(63.3%)、「教授方法についての知識」では11名(36.7%)、「子どもについての知識」では5名(16.7%)、「教職に対する情熱」では17名(56.7%)であった。このことから、学生は、「教材内容についての知識」を多く得ており、「教職に対する情熱」を高めていたことがうかがえる。

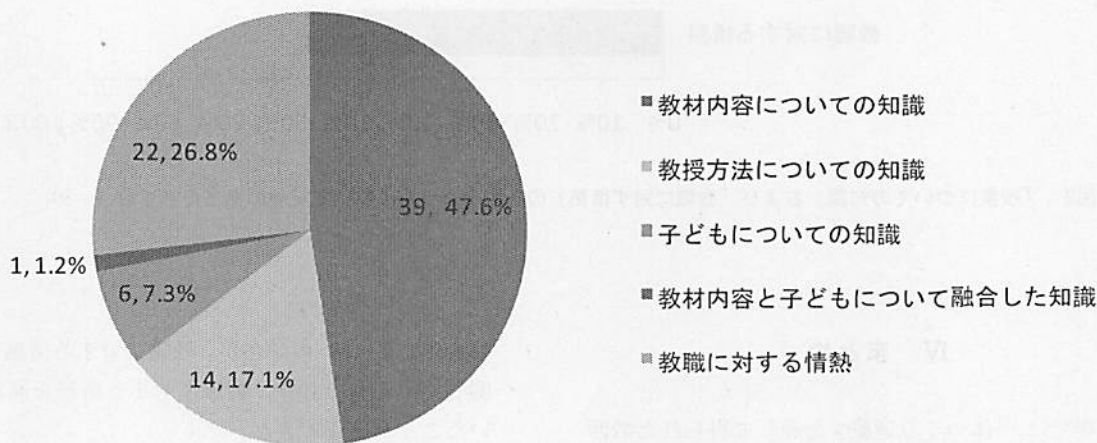


図8 「授業についての知識」および「教職に対する情熱」の各カテゴリーにおける記述数および割合

表2 「授業についての知識」および「教職に対する情熱」の各カテゴリーの記述例

授業に関する知識	
教材内容についての知識	<p>道具を使わずにできる運動が、こんなにたくさんあったのだと毎回驚いた。</p> <p>歩く動作の奥深さ、大切さを学ぶことができた。</p> <p>「体づくり運動」では、基本の運動（歩く、走る、跳ぶ、投げる）をまんべんなく行う必要がある。</p>
教授方法についての知識	<p>教授法について色々学べた。</p> <p>脈を測ったり、呼吸を意識したりすることによって、「自分の体への気づき」を感じる事ができた。</p> <p>教師は、太陽や風の方向を確認することが必要。</p>
子どもについての知識	<p>子ども一人ひとりの様子を見て、健康を確認したり、足りない力を補うような働きかけをしたりすることが必要。</p> <p>子どもだったらどうかということを常に意識して授業に取り組んだ。</p> <p>子どもの発達段階の特徴を考慮することが必要。</p>
教職に対する情熱	
	<p>大学生活の中で、教材の知識にふれ、現場に出るまでできるだけ多くストックを作りたい。</p> <p>体育の指導者として教養と研究に励み、しっかり勉強していきたい。</p> <p>運動の楽しさを伝えられる先生になりたい。</p>

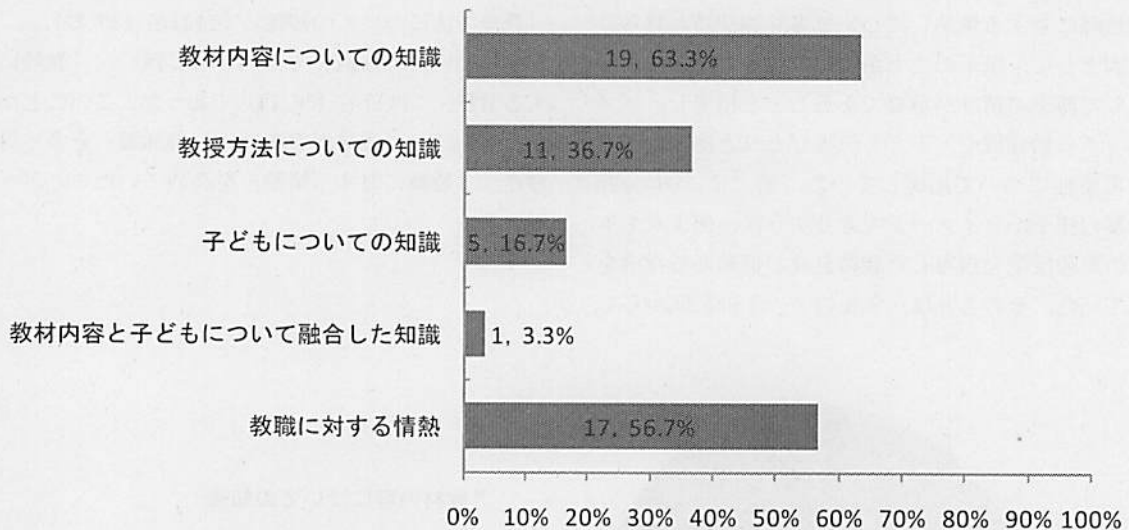


図9 「授業についての知識」および「教職に対する情熱」の各カテゴリーにおいて記述のあった学生数 (n=30)

#### IV まとめ

本研究では、「体づくり運動」を通して得られた教師に求められる知識を明らかにするため、総括レポートの内容を分析した。結果は以下の通りであった。

- 30名中19名、63%の学生が、「教材内容に関する知識」に関して記述しており、教材内容に関する知識を最も多くを修得していたことが確認できた。

- 30名中17名、56%の学生が「教職に対する情熱」に関して記述しており、教職に対する情熱を高めていたことが確認できた。
- 「授業についての知識」では、各々の融合するカテゴリーが重要であるが、本研究では、教材内容と子どもについての知識が融合するカテゴリーにおける記述が1つだけであり、知識を関連させ思考するまでには至っていないことが示唆された。

本研究では、授業の総括レポートを分析の対象としたため、「体づくり運動」の授業を通して得られた知識について精緻に分析できたとはいえない。授業で得られた知識について、より精緻に明らかにしていくためには、毎授業後に学生が記述したノート进行分析することが必要となる。また、「体づくり運動」の授業で何を教えたのかについては、学生のまとめたノートを参考に、その概要を示したのみであり、指導内容についても詳細を分析することが必要である。

さらに今後は、その他の教員養成にかかわる授業についても同様に、何を教え、どのような力が身についたのかを明らかにしていくことが課題である。

## 文献

- 中央教育審議会（2005）新しい時代の義務教育を創造する（答申）。
- 糸岡夕里・日野克博（2008）模擬授業における生徒のつまずきの把握とその指導の有効性。スポーツ教育学研究第29回大会号。p. 52.
- 三木四郎（2009）いま、なぜ「体づくり運動」か。体育科教育57(5)：10-13.

- 文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説体育編。東洋館出版社，東京。
- 杉山允宏（2002）21世紀における生活体力を考える。愛媛体育学研究6：1-9.
- 吉崎静夫（1997）子どもの発達と教育10デザイナーとしての教師アクターとしての教師。金子書房，東京。

## 注

- 1) 吉崎（1997）は、カテゴリー3として「3.生徒についての知識」と提案しているが、ここでは児童をさす内容でもあることから、「3.子どもについての知識」とした。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、快くご協力いただいた愛媛大学教育学部保健体育講座杉山允宏教授およびその授業を受講した学生へ対し、衷心より感謝申し上げます。